

19. 生命科学研究科附属放射線生物研究センター

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 51)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 52)

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 高い質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

組織改編により、平成 28 年度には 32 件だった共同利用研究数が平成 30 年度には 55 件となり、利用数が向上している。また、教員一人当たりの外部研究資金を含む研究費が高い水準にある。

〔優れた点〕

- 有機的な組織改編により、平成 28 年度には 32 件だった共同利用研究数が、平成 30 年度には 55 件となり、着実な成果に結びついた。
- 教員 1 人当たりの研究費（外部資金を含む）が平成 28 年度は 33,000 千円、平成 29 年度は 35,100 千円と、極めて高い水準であった。

〔特色ある点〕

- 福島原発事故による放射線の人体および環境に対する影響を、一般市民が正しく理解し対応できるような知識を養うために、当研究センターの教員を中心に当地に研究者を派遣し、市民公開講座を実施する事業を展開した。（平成 30 年度は 26 回実施）。令和元年内に京都大学の教育拠点を福島県郡山市に設置し、当該事業の更なる拡充を図ろうとしている点は特筆すべきである。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 特筆すべき高い質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績、社会・経済・文化的に卓越している研究業績が、それぞれ、1件、2件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、特筆すべき高い質にあると判断した。

学術的に卓越している研究業績である「がんが悪性形質と治療抵抗性を獲得するメカニズムの解明」では、悪性固形腫瘍の発生、浸潤・転移、治療抵抗性、さらには同一腫瘍内遺伝型多様性を担う分子機構に迫る研究を展開し、ヒストン蛋白質の変異ががんの悪性進展を正に制御するメカニズムや、がん細胞が UCHL1 という遺伝子の活性化を介して糖代謝経路をリプログラミングして腫瘍増殖と放射線抵抗性を導くメカニズムを解明している。この成果の平成 30 年の論文が、わずか 1 年の間に 41 度引用され、波及効果とインパクトの高い論文であることが挙げられる。